

第3回「泉大津市オリウム随筆賞」

【優秀賞】

器

山本幸・兵庫県

「あれっあんた、カーディガンは？」
小学一年生の私に、母は尋ねた。

ない。ひじに掛けて持っていたはずの、黄色いカーディガンがない。昨日母が編み上げたばかりの、まだ数時間しか袖を通していないカーディガン。

日曜日。両親と一緒に神戸の繁華街・三宮にいた。人混みで暑くなった私は黄色いカーディガンを脱ぎ、小さな細い腕に掛けて歩いていった。買い物も食事も終えて駅に向かって帰りかけていた時、母に指摘されて初めて落としたことに気がついた。焦った私は、今来た道を戻ろうとした。父は私の腕を引っ張り、「もう見つかれへんわ。こんな人混みの中でどこで落としたのか分からへんよ」と言って、あっさりあきらめた。母も笑っていた。

母は自宅で編み物を教えていた。ショーウィンドウで見かけた素敵でデザイン、雑誌に載っていた最新のニット、頼めば母は何でも編んでくれた。

「こんなん嫌や。私着ない」

中学三年生の私は、吐き捨てるように言った。母の手の中には編みかけのセーターがあった。

「恥ずかしい。もっとシックで大人っぽいデザインが着たい」

小学校高学年から高校まで、思えば長い反抗期だった。反抗期というより、単に学校でのイライラを母にぶつけていたように思う。せっかく作ってくれた料理を「食べない」と言ったり、買ってきてくれた洋服を「着ない」と言ったり、そんなことばかり続けていた。

その時も、母の手にあったセーターが気に入らなかった。空色の地に白い雲が浮かび細かい景色が編み込まれた絵柄は、どこの店にも売っていないような精緻なデザインだった。ただ、全体的に可愛らしい雰囲気があって、大人の女性に憧れていた当時の私には耐えられなかった。すでに前身頃と後身頃を編み終え、あとは袖を付けるだけの状態だった。

「私着ないから。近所の子にでもあげたら？」

とどめの一言を放つと、私は自分の部屋へこもった。母は何も言わなかった。

翌朝、リビングの隅に空色のかたまりがあった。夜のうちに母は、あのセーターをすべてほいだのだ。ふわふわとした毛糸のかたまりを、見て見ぬ振りをした。母は普段通り朝食を作り、いつも通り笑顔で私を学校へ送り出した。

あの晩私は自分の部屋へこもってしまったから、母がセーターをほどこ姿は見えていない。見えていないはずなのに、黙々と空色の毛糸をほどこしている背中を思い出すことがある。母は長年編み物をしていたから何かを編んでいる姿や、小さくなってしまった兄や私のセーターをほどこいて別の物に編み直す姿は何十回も何百回も見ている。おそらく他のセーターをほどこ姿が、私の記憶の中で空色のセーターにすり替わってしまったのだろう。記憶の中の母は背中を丸めていて、でも顔は微笑んでいる。

空色の毛糸が母のセーターになったのか父のカーディガンになったのか、その後の記憶は不思議に抜け落ちている。思い出すのは、ほどこしている姿だけだ。記憶はいつでも組み合わさったり入れ替わったり、時に都合良く忘れていたりする。

中学生の時にそんなことがあったにも関わらず母は、高校生の私にも大学生の私にも社会人の私にも、セーターやワンピースを次から次へと編んでくれた。その時々私のサイズや好み、流行を取り入れてはデザインして編んだ。私も空色の編み込みセーターのことなどすっかり忘れて、あれこれリクエストしていた。

黄色いカーディガンも空色のセーターも、とても人には言えない恥ずかしい思い出だ。それなのに恥ずかしい思い出の中の母は、いつでも笑っている。受け止める笑顔だ。親という器は、すべてを受け止める。子供は「これでもか」と水を注ぐ。子供が水を注ぐたび、あふれないように器は少しずつ大きくなる。

失敗した時、落ち込んだ時、空色の毛糸をほどこ母の背中が浮かぶことがある。本当は見えない姿なのにあの背中があったこと、私を受け止める器がこの世にあったことを、たまらなく懐かしく思い出す時がある。そして同時に「私を受け止める器は、もうこの世にはいないんだ」という事実にうちのめされる。感謝はいつも遅れてやって来る。

母が逝って四度目の春が終わる。